

越後妻有 大地の祭り 2010 夏

1ヶ月の祭りレー もうすぐスタート!!

会期：2010年8月1日(日)～8月31日(火)
会場：越後妻有2市町760km(新潟県十日町市・津南町)



会期中に開催される主なイベント (※)

日時	イベント名
1日(日) 10:00～	内田あくり「日本画ワークショップ」
6日(金) 10:00～	うぶすなの家・ちまき祭り
7日(土) 11:30～	オーストラリアハウスパーティー
18:30～	人形浄瑠璃ヌーベルバーグ 沖嶋民謡 × 文楽人形
8日(日) 13:30～	古謝美佐子唱会
16:30～	渡辺泰幸「音具と遊ぶ」
12日(木) 14:00～	きむらゆういち&田島征三 ギャラリートーク
14日(土)	真夏の雪祭り (大蔵寺高原)
15日(日)	明後日カップ (10・15時) & 盆踊り (19時～)
16日(月) 14:00～	伊沢創作和紙であかりを作ろう
19:00～	小室等と録でウonderバチット
22日(日) 13:30～	室野神楽 × 生意気
	車座おにぎり (日時/場所は公式HPにて更新)

※各イベントの詳細は大地の芸術祭の里HPでチェック!
<http://www.echigo-tsumari.jp/>

こへび新聞

2010年7月7日

発行



発行元：大地の芸術祭運営事務局
(NPO法人越後妻有里山協働機構)
〒942-1526
新潟県十日町市松代3743-1
Tel 025-595-6688
Fax 025-595-6181
info@tsumari-artfield.com

第5回
大地の芸術祭開催まで
746日

がんばっていきましょい!

今日は七夕!

まだまだ梅雨の明けの予報は無いけれど、今年はちゃんと天の川が見れるでしょうか? 空気のきれいな妻有では本物の天の川が堪能できます! そう、晴れてくれさえすれば...

「大地の祭り」は妻有の自然、生活、住民をアートで彩ったお祭り。「1ヶ月の祭りレー」と題し、会期中、毎日お祭りイベントとワークショップを開催します。地域と都市が協働でつくる「大地の芸術祭の里」のお祭りがいよいよスタートします。

★「大地の芸術祭の里」作品約200点を一挙公開
スタートから10年が経過し、地域に根付いた作品から昨夏の新作まで、アートを道しるべに里山を巡る旅をお楽しみください。

★「夏の里山アートツアー」ガイドのご案内
十日町市を中心とした広域エリアに点在する作品を、効率よく堪能できる2コースをご用意。迷わず、ガイド付きなので作品をさらに楽しめます。

★「農舞台ギャラリー企画展「生まれ続ける芸術」現代の農村舞台」
作家、生意気が里山の植物を素材に舞台を制作し、来館者は芸術の衣装・獅子頭などを身に着け、踊りを楽しめます。会期7月17日～11月23日

主催：大地の祭り2010夏実行委員会
料金：バスポート(3日間有効)大人2,000円/小中高生500円
※その他、個別鑑賞券も有
バスポート販売場所：まつだい「農舞台」、まつだい駅観光案内所、ほくほく何でも案内所(十日町市観光協会)、越後妻有交遊館 キナレー、森の学校キョロロ、津南町観光協会案内所他

新潟県内小中学生をこの夏も、大地の祭りに招待します。
十日町市・津南町住民限定の地元バスポート販売中!

かたくりの宿、オープンしました!

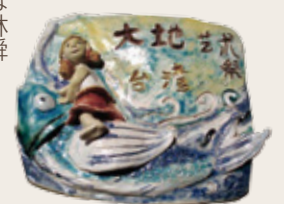


↑見倉橋(左)とかたくりの宿(右)。
↓管理人の渡辺夫妻。



5月15日、秋山郷の「かたくりの宿」がオープンしました。音楽室・図書館は客室に、校長室は秘湯の女湯に。地元の方々に愛されて百年以上も続いた小学校に泊ってみませんか? さわやかな笑顔の渡辺夫妻と、美味しい地元の食事と秋山郷の萌える緑。この夏はかたくりの宿で自然に癒されてみては?

このたび、穴山集落と台湾の六結村&大忠村が姉妹村提携をしました。2009年の芸術祭で「北東アジア芸術村」として台湾・中国・香港のアーティストを受け入れた津南町。穴山集落では林舜龍(リン・シュンロン)さんが制作を行いました。今回の姉妹村締結はその林さんが、台湾の両村で開催された芸術祭に参加した際、穴山の住民が招待され、蕎麦打ちと尺八を披露したことがきっかけ。4月29日に両村から10名の方が来日され調印式を行いました。穴山集落の人口は40人。対する台湾の両村は合計4000人。今後は「まず台湾に行ってみよう」と若井加津美さん。アートと人が繋いだ日本と台湾の友好がいよいよ始まります。



↑姉妹村提携の証書を掲げる若井加津美さん。作品の牛とともに。

つまり劇場

絵：米山米子 作：米山耕



★大人気の「絵本と木の葉の美術館」は鉢にあるよ!

NPO総会&懇親会がありました!

6月19日(土)にNPO法人越後妻有里山協働機構の総会が開催されました。その夜には「農舞台・まつだい食堂」でNPO懇親会が行われ、こへび隊、かかし隊、NPO会員、農舞台スタッフなど約50名が集まりました。見た目も味も、これまた芸術作品のような料理を楽しんだり、こへび隊で発表(みんなで描いた絵と、あいうえお作文「越後妻有里山協働機構」を紹介)をしたり、それぞれの親交を深めました。

集まった皆が妻有を大好きなことを感じる事ができ、しかもその後には蛭を見ることもでき、とても温かい気持ちになった夜でした。



今回は2009年の芸術祭で十日町池沢集落にて《うかのめ(※)》を制作した石塚沙矢香さん。個展「カケラノユクヘ」(6月5～27日元麻布ギャラリー平塚)を開催されていた石塚沙矢香さんを訪ねました。

※うかのめ=稲魂女。食物をつかさどる神のこと。

うかのめをやってなかったらこの作品は生まれなかったかも。

アーティスト紹介 vol.1

石塚沙矢香さん



《カケラノユクヘ》は、インスタレーションを中心に発表する石塚さんが手掛けた、《うかのめ》以来の大掛かりな作品です。そのテーマは「食卓の記憶」。どこかで見たことがあるような食器やそのカケラたちが集まったり、離れたところで固まったりして床に置かれていたり、糸でつながれていたり...。人がそばを通った時のわずかな風で揺れ動く欠片は、さまざまな表情を見せてくれます。

『あの食器、おばあちゃんの家にあったのに似ているな』というような「気づき」をきっかけに、見てくれている人の中に、温かくて懐かしい思いや切ない気持ちが生まれて、昔から今につながる時の流れといったものまで考えてもらえたら...と石塚さん。この作品は、《うかのめ》がなければ生まれなかったといえます。

2000年、美大生だった石塚さんは、こへび隊をしていた友達に誘われて初めて

妻有に足を踏み入れました。その後ご自身もこへび隊となり、芸術祭会期終了後も他のアーティストのプロジェクトに関わるなど、積極的に活動が続けていました。

2004年に大学を卒業した後モアティストとしての道を着実に歩んでいた石塚さん。越後妻有大地の芸術祭で作品を制作するかどうかは、「自分にとっての挑戦でもあった」といいます。

「自分も妻有で制作するのなら、何をやるんだろう?」そう考えたとき、石塚さんの記憶によみがえってきたのは、こへび隊に参加した時に地元の人々が握ってくれたおにぎりの味。そのおにぎりに込められた気持ちの温かさ、優しさ、です。

そんなこともあり「お米を使う」と決めた後、食べ物や作品に使うことに対する反対の声を聞くこともあった石塚さんは、「お米」というものの存在の大切さに改めて気付かされた。」と話します。



↑笑顔で取材に応じてくれた石塚さん(写真上・右)
大地の芸術祭(2009年) 展覧作品《うかのめ》。

作品はさらに、「お米」から「食卓」「食卓」から「記憶」へと石塚さんの中でつながっていききました。

「うかのめ」のときにお米を雨のようにたくさん降らせて、その間にお茶碗やあの家にあった食器を吊るして、日本の食卓や家庭のイメージが思い浮かぶようにしたいなと思っていました。食卓の風景の記憶というのは、共通で誰でも持っています。「食卓の記憶」は「うかのめ」のお米から「食卓」というキーワードが出てきたのです。《うかのめ》をやったなかったら今回の作品はありませんでした。」

石塚さんは10月にINAXギャラリー、11月に辻堂にあるギャラリーにて個展を開催しています。今後石塚さんの手から生み出される「記憶」と結びついた作品に注目です。

オーストラリアハウスのレジデンス、入居開始



↑家主の保坂ご夫妻と共に。

オーストラリアからフェルト作家のモード・パースさんが、夫で小説家のクリス・ダグウェルさんと共に、浦田地区にある「オーストラリアハウス」に入居しました。パースさんは20年前にニュージーランドでフェルト作品の制作を学び、イギリスやロシアで活躍をした後、オーストラリアでは看護士として働きながら作品制作をしています。2年前に京都を訪れてから日本が好きになったというお一人。

「妻有は水が豊富で、木々が輝いています。オーストラリアは乾燥していて、植物も緑ではないのです。」と意欲をみせます。

最終的には、モードさんの指導の下、地元住民と共に作るスクリーンを障子のフレームに貼って作品を制作する今回のプロジェクト。

滞り期間中、様々なワークショップを開催するモードさん。「日本の皆さんがフェルト作りを楽しんで、私の作品制作に携わってくれればいいなと思っています。日本のフレームとオーストラリアのスクリーン、日本のモチーフとオーストラリアのモチーフ、日本人の方々とオーストラリア人の私たち。日蒙が混ざり合って作品を作っていくと思っています。」

その障子フレームを作るのは「オーストラリアハウス」の家主で木工の保坂さんです。「もう40年も空き家だったこの家に、まさかオーストラリアの方が住むことになるかも」と誰かが住んでくれるという事は、嬉しい事です」と、保坂さん。完成した作品はオーストラリアで開かれる2つの展覧会で展示された後、再び浦田に戻ってくる予定です。

日蒙の文化を融合させたこの取り組み、ワークショップの詳細はオーストラリアハウス公式サイトをチェック!
<http://echigoaustralia.or.jp/>

染色済みのブラッシングしたウールを少量ずつ引きちぎり、縦横に置く。水、洗剤の順にうえからかけ、巻き巻いて50回ほど揉む。



妻有のイケメン発掘します!
妻有MEN

山賀 歩 さん

山賀モータース 整備士

1980 年生まれ 29 歳

血液型：A型 身長：176cm 体重：62kg

出身：新潟県十日町市松代

Q. 彼女は?→A. 奥様&2人のお子さん

自動車の専門学校に通うために上京。その後就職し、静岡、京都、石川に勤務した後に家業を継ぐため松代にUターン。趣味は釣りで、この日も朝3時半 (!) に起床して糸魚川に釣りに行って来た後でした。最近ではイナダを釣って自身でお刺身にしたとか。

女子こへびのレコメン!

整備の仕事をしているだけあって男らしい大きくてゴツゴツした手。同年代としては、もしもクラスにいたら、女子からも男子からも好かれる感じのツマリメン! 農舞台S氏のマイカーのバッテリーが頻繁に上がってしまう理由もわかるなあ...

INFORMATION

さわやかなで好印象の歩さんに会えるのは、「山賀モータース」。車で困った事があったら、お気軽に!

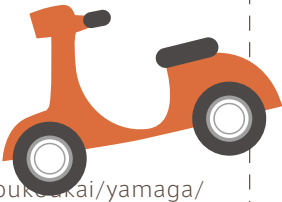
山賀モータース

新潟県十日町市松代 3649-1

☎ 025-597-2121

FAX 025-597-2267

http://www.matsudai.com/syoukai/yamaga/



「じゃあ解体を始めようかという時に、大地の芸術祭の方が」家を見せてくれた。雪深いこの地域で空き家を放置しておく事は、とても危険な事。空き家は安全のために解体されるのが一般的です。一家が集落から出て行き、空き家になった牧田家も例外ではありませんでした。しかし...

「レイアウトはかなり変わっているんです。だけど骨格は変わっていない。目を閉じてバツて考えるとすぐ...。すぐ自分の家です。もう、昔の情景が浮かぶ。すごく懐かしい感じがする。二階が半分に...。僕は昨夜、もう十年振りですが、自分の部屋で寝たんです。なんだか、すごく寝心地が良かったし、朝パツて起きた時に「あ、あれ??ウチだ。」本当にウチだっという感じがあつて、すごく良い朝でした。



↑「脱皮する家」内部。梁や建具の表面まで余すところなく「脱皮」させられている。

星峠の《脱皮する家》は2006年に完成した鞍掛峠さんと日本大学芸術学部のある学生達による空き家アート。抜け殻になってしまった家全体を彫刻刀で彫ることに。脱皮・再生させた作品です。初夏、その《脱皮する家》の宿泊客として妻有に帰ってきたのは以前の住人、牧田賢治さん。作品制作期にも携わり、作品になってからも何度も作品に足を運んでいるという牧田さん。しかし宿泊するのは今回が初めてのこと。アートのなつた我が家の中で、その想いを語っていただきました。

脱皮した僕の家



牧田賢治 さん

と、よく分からないけれど、この柱をみると、天井裏に入っている上の方を見たりして「この家は素晴らしい」と言うんです。「なにを言っているんだ。このボロ屋を」と思いました(笑)。ところがそのうちに話が進み、結果的に「この家を買ってください」という話になって。待って、壊そうとしているし、すごいボロ屋だし。買った何にするんですか?と訊いたら「芸術祭の作品にしたいです」。いや、都会の人の考えることとは分らないな、なんて思いました。それから、どうすべきか悩み、集落の方にも色々相談をし、色々な人の説得とかもあり...

そのような経緯があり、日大の学生が2年間毎週10~20人ずつ通い続けて出来た作品。それが《脱皮する家》です。

「学生さんが沢山来て、トンテンカン・ナンカンしていたのも、ずうと見ていました。僕も、学生さん「こうやって彫るんですよ、いやもうちょっと深く」なんて教えていただいて、5~6彫りしました。本当に壊す予定で、今ここには何にもなかったはずなんです。なのに、素晴らしい作品になって、しかも何千人何万人という方が訪れている。これは本当に、ただの奇跡ではないと思っています。昨日(宿泊した日)もそんな話を熱く話していたんです。本当に、形は変わってもやっぱり自分の部屋です。本当に匂いは変わらないんですよ。ウチの匂いだったり、峠の匂いだったり。

かつてのご自分の部屋で「んんん!」ここからの景色は、間違いない僕の部屋。変わらない」と話してくれた牧田さん。その向こうには星峠集落の深い緑と青い空が広がっていました。



↑牧田さん&取材にお邪魔したこへび達。「ここからの眺めは最高ですね!」

《脱皮する家》に関するお問い合わせは
大地の芸術祭の里総合案内所まで。
TEL: 025-595-6688
FAX: 025-595-6311

TSUMARIOFOODS

こへびのパワフルな活動の源、それは妻有の美味しいたべもの! あちこち駆け回ってヘトヘトになった胃袋を満たしてくれる妻有フードをご紹介します!



三省ハウスの食事↑

こへびの朝晩の食事は三省ハウスの食堂で食べます。集落のお母さんたちが交代でつくってくれるごはんは季節の野菜や山菜、果物などをはじめ妻有ならではのものが盛りだくさん。感謝!



←三角ちまき

昔は農作業の合間に皆で食べたという、もち米を笹で包んだだけの素朴な携帯食「三角ちまき」。きな粉をかけて食べるのが一般的。

ある日のこへびの活動風景 vol.1

こへびっていろんな場所に出没するけど、どんな仕事してるの? そんな疑問にお答えします! 今回ご紹介するのは「作品メンテナンス」。お客さんがいつ来ても良いように作品のまわりを掃除したり、時には修理したり。大地の芸術祭の里にはたくさんの作品があるので、やってもやってもなかなか終わらない!



↑季節は初夏。まだまだ山菜は食べ頃でした。→「たくさんの失われた窓のために」の整備中。意外に大きいのでカーテンの補修も二人がかり。



↑ようやく完了! こんな記念写真が撮れるのもこへびの特権?

管理人さんに聞く夢の家 10 年史

上湯集落にある《夢の家》は芸術祭の人気作品。作家は最近 NY の MoMA で企画展を行い、世界的に活躍している旧ユーゴスラビア出身のアーティスト、マリーナ・アブラモヴィッチです。「自分自身と向き合うために、夢を見てほしい」というコンセプトの、古民家を再生した宿泊できるアート。そんな《夢の家》を見守ってきた管理人のお母さん 3 人にお話を伺いました。

いろんな人が来たよね。

マサコさん

サチコさん

集落に《夢の家》ができて 10 年。変化は?

エミコさん (以下、エ) : 《夢の家》が出来て、じいちゃんばあちゃんも元気になったとか?

サチコさん (以下、サ) : よその人を見ても話しかけるようになったよね。

エ : みんな今、挨拶してくのよ。だから明るくなったじゃない。

サ : 話しかけるようになったしね。

マサコさん (以下、マ) : 慣れたんだよね。お客さんに。

遠方から来る方、現代美術を学ぶ人、「故郷」を求める家族連れ、違う色の部屋に泊まりたいというリピーター。《夢の家》にはさまざまなお客さんが来ると伺いますが、大変なことは?

サ : ワタシはね、外国の方。

マ : ハローなんて言われるともう構えちゃって。一応、受付っているのは入館料をもらうのが一番の仕事だとワタシは思っているのね。500 円玉を出してみたり、100 円玉持てこうやってみたり (右手でパー)。やっぱりジェスチャー。

靴のまま土足で上がろうとする。だから、NO! (手を前に笑)。サ : あと、ここは宿泊の方だけに、私たち帰っちゃうわけだし。何があるか分からないから、それが心配で。

エ : でも、うちを貸し出してお客様泊まってもらっても、無くなつたものってないよね。そういう来る人の善意とかもすごいよね。

印象に残っている宿泊客は?

マ : 旧ユーゴスラビアの女性が出来てこのインスタントコーヒーを出したのね。そして最高に美味しいコーヒーで、日本に来て初めてこんな美味しいコーヒーを飲みましたって。

「インスタントコーヒーですけれども...」って (笑)。

サ : ほらこの作家が旧ユーゴスラビアの方だから、気分もあるんだろうね。

マ : 水の美味しさもあるよね。

宿泊があるときは掃除、後片付け、お客様の館内の案内などをされているお母さん方。特に冬の空き家は生活の温もりが無いので、雪は解けずに凍みついてしまおうか。冬はそんな雪の様子を、夏は農作業の傍ら宿泊客を。お母さん方が一年中《夢の家》の様子を気にかけている事が伝わってきました。

マ : 洗濯もんが干してあるとタベ泊りがあったのかなとかね。

サ : いつもここ通ると「今日夢の家にかあったのかな」とか、普通の日に窓が開いたりすると、「あれどうしたのかな」とか。

責任感とパワフルさを持ったお母さん方の様な集落の方々の支えて、10 年目も《夢の家》は開館されています。たくさんの方の「夢」を積み重ねて今も魅力を持ち続けるこの作品に、ぜひ一度夢を見に訪れてはいかがでしょう?

エミコさん



編集後記

妻有の蛇が冬眠から目覚める春、こへび新聞編集部も活動を始めました。それから数ヶ月が経ち、様々な方のご協力のもとで「こへび新聞」が創刊に至りましたことを心より感謝いたします。しかし、私たちの目標は「新聞を創刊すること」ではありません。目標は、この新聞を通して「越後妻有大地の芸術祭」に関わる人々の絆が広がること、そしてより一層に深まることです。妻有の夜に瞬く虫のように、読んでくださった方の心がホッと明るくなりますように。七夕の日に願いを込めて、2010 年 7 月 7 日に「こへび新聞」を創刊します!

こへび新聞編集長 山田

こへび隊大募集!!

越後妻有大地の芸術祭のサポーター「こへび隊」は、脱皮する前の未熟な「こへび」の集まりです。2000 年に大地の芸術祭が始まってから 10 年。私たちは未熟ながらも、地域の人びととの関わり、他者の土地に入り込む責任、芸術祭のレベルを落とせない真剣勝負のぶつかり合い、そのなかから生み出される力を大切にして、何よりも楽しく活動を続けてきました。そんな私たちと一緒に、いつか脱皮する日を目指して活動をしていくメンバーを募集しています!

★どうぞお気軽にお問い合わせください。
Mail : kohebi3@yahoo.co.jp
こへび隊 HP : http://kohebi.blog85.fc2.com/

こへび新聞編集部

編集長 : 山田 淳子

執筆/取材協力 : 岩本菜摘美、上原高夫、滝川薫、武田綾子、塚田隆、土井里絵子、中島優子、藤村真美子、前田明彦、米山耕、伊藤美紀、米山米子

デザイン : 井出はるか、山崎絵梨、守屋智子

→こへび新聞編集会議 (5 月都内某所にて)

